

村 内 遺 跡 I

埼玉県指定史跡 小倉城跡

第1次発掘調査報告書



郭3 石積み遺構

2005

埼玉県比企郡

玉川村教育委員会



小倉城跡 東から (尾根左城跡、手前小倉、奥遠山、中央上端下里、蛇行する楢川)



小倉城跡 北から (尾根上端から中央城跡、左小倉、右遠山、右奥下里)

口絵 2



▲ 染付外面



▲ 染付内面



◀ 白磁



◀ 大窯期瀬戸・美濃

第1次調査出土搬入陶磁器

## 序

玉川村は、埼玉県のほぼ中央に位置し、清流と里山を中心とした自然豊かな木の香る村として発展してまいりました。

このたび、埼玉県発掘調査評価委員会・比企地域中世遺跡検討委員会の指導のもと、大規模な石積みの所在する中世山城として高い評価が与えられておりました埼玉県指定史跡小倉城跡の発掘調査が当教育委員会により学術調査として実施することになりました。

調査の結果、本郭に多くの建物跡が検出されたのをはじめ、当時の城内での生活を窺わせるような様々な遺物が出土しました。これらの成果により、小倉城跡の具体的な様相が明らかとなり、北武藏における戦国時代の歴史や中世城郭の研究に一石を投じることになりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。文化財保護思想、生涯学習の資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸に存じます。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立歴史資料館、地権者並びに地元関係各位に多大なるご指導ご協力を賜わりました。刊行にあたり厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

玉川村教育委員会教育長

野口昌夫

## 例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡玉川村大字玉川字城山ほかに所在する、県指定史跡小倉城跡（県遺跡番号No041-022）の報告書である。
2. 発掘調査と整理作業は文化庁国庫補助金・県補助金・村負担金をもって玉川村教育委員会が実施した。発掘調査並びに整理・報告書作成作業は平成15年5月26日から平成17年3月25日に亘った。
3. 発掘調査は矢部亮司が担当し、現地の発掘調査及び写真撮影は矢部が行い、現地写真の一部と遺物写真の撮影及び本書の編集は石川安司が行った。
4. 発掘調査から本書作成に至る間に下記の方々、諸機関からご指導ご教示を賜った。銘記してお礼申しあげる。（五十音順、敬称略）

秋本太郎、浅野晴樹、天ヶ嶋岳、伊藤正義、井上尚明、植木弘、梅沢太久夫、江原昌俊、太田賢一、小野正敏、柿沼幹夫、栗岡眞理子、齋藤慎一、坂井秀弥、柴田龍司、杉山正司、関口和也、関口正幸、高崎直成、高橋一夫、田中信、中島宏、西股総生、野村智、橋口定志、林宏一、藤木久志、松岡進、水口由紀子、宮島秀夫、宮田毅、村上伸二、弓明義、吉田義和、渡邊一、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立歴史資料館、中世を歩く会

5. 発掘調査及び整理作業員

村田悦子 小野田照子 池永文代 浅見元一 小島忠一 根岸マサ子 蓮見寛子

## 目 次

|     |                              |    |
|-----|------------------------------|----|
| I   | 発掘調査の概要 - - - - -            | 1  |
| 1   | 調査に至るまでの経緯 - - - - -         | 1  |
| 2   | 発掘調査と報告書刊行事業の組織 - - - - -    | 2  |
| II  | 地理的・歴史的環境 - - - - -          | 3  |
| 1   | 地理的環境 - - - - -              | 3  |
| 2   | 歴史的環境 - - - - -              | 3  |
| 3   | 遺跡の概観 - - - - -              | 6  |
| (1) | 縄張り - - - - -                | 6  |
| (2) | 石積み遺構 - - - - -              | 6  |
| (3) | 平成 15 年度以前の採集・出土遺物 - - - - - | 8  |
| III | 遺構と遺物 - - - - -              | 14 |
| 1   | 遺構 - - - - -                 | 14 |
| (1) | 建物跡 - - - - -                | 14 |
| (2) | 整地層 - - - - -                | 14 |
| (3) | 建物跡 - - - - -                | 17 |
| 2   | 遺物 - - - - -                 | 17 |
| IV  | 小 結 - - - - -                | 18 |

## 挿図表目次

|      |                              |    |
|------|------------------------------|----|
| 第1図  | 周辺の遺跡 - - - - -              | 3  |
| 第2図  | 小倉城跡地形測量図 - - - - -          | 4  |
| 第3図  | 小倉城跡概要図 - - - - -            | 5  |
| 第4図  | 石積み配置図 - - - - -             | 6  |
| 第5図  | 郭 3 西外面、南外面石積み立面図 - - - - -  | 7  |
| 第6図  | 平成 15 年度以前の採集・出土遺物 - - - - - | 8  |
| 第7図  | 郭 1 測量図 - - - - -            | 9  |
| 第8図  | 遺構配置図 - - - - -              | 10 |
| 第9図  | 東西トレンチ セクション図 - - - - -      | 11 |
| 第10図 | 南北トレンチ セクション図 - - - - -      | 12 |
| 第11図 | 遺物分布図 - - - - -              | 13 |
| 第12図 | トレンチ出土遺物 1 - - - - -         | 14 |
| 第13図 | トレンチ出土遺物 2 - - - - -         | 15 |
| 第14図 | トレンチ出土遺物 3 - - - - -         | 16 |
| 第15図 | トレンチ出土遺物 4 - - - - -         | 17 |
| 第1表  | 平成 15 年度出土遺物組成表 - - - - -    | 18 |

## 写真図版

図版1 大福寺と小倉城跡 小倉城跡と櫛川 小倉城跡と城から伸びる直線道

図版2 郭1 東下腰郭石積み 郭3 東面石積み 郭1 東下腰郭石積み 郭3 東面石積み  
郭1 東下腰郭石積み 郭3 西面石積み 郭3 虎口石積み 郭3 西面石積み

図版3 郭3 東面石積み 郭3 東面石積み 郭3 東面石積み 郭3 東面石積み折れ部 郭3 東面  
石積み 郭3 東面石積み折れ部 郭3 東面石積み折れ部 郭3 南東コーナー石積み

図版4 郭1 東西トレンチ（西から） 郭1 東西トレンチ（東から）  
郭1 南北トレンチ（南から） 郭1 南北トレンチ（北から）

図版5 第3建物群 第3建物群 第1建物跡 第2建物跡 通路2 通路2段状掘削  
通路1 通路1と土層

図版6 郭1 トレンチ出土カワラケ

図版7 在地土器（表面） 在地土器（裏面） 大窯期徳利小瓶 古瀬戸合子  
常滑大甕（表面） 常滑大甕（裏面） 涅美及び常滑大甕 常滑大甕

図版8 板碑 硯、砥石 基石 金属製品 碗形澤 壁土

## I 発掘調査の概要

### 1 調査に至るまでの経緯

昭和 11 年に県指定史跡となった小倉城跡は、関係者の努力により良好に保存され戦後も地元小中学校の児童生徒が遠足で訪れるなど地域に親しまれた存在であった。その後昭和 40 年代以降の急速な生活様式の変化と 50 年代以降の松食い虫による赤松の枯死は小倉城においても例外ではなく一部に荒廃が見られる部分もあった。そのような中、玉川村では昭和 61 年度策定（目標年度平成 7 年度）の第 2 次総合振興計画において「小倉城跡の整備」を挙げ史跡公園として整備することが提唱された。教育委員会では、それを受け平成 4 年度に城跡の測量調査を行い、5 年度には城跡の保存管理に関する地元説明会を実施した。その中で城跡内山林の荒廃に伴う下草刈りなどの環境整備の必要性が話題となったのである。そして、まず行政を中心に伐開、下刈りを実施することとなり、再び人々が訪れる城跡を目指した環境整備事業が開始されたのである。環境整備の下草刈りは平成 5 年度より現在も継続して実施されている。さてその環境整備活動の中で重要な発見があった。それは、従来樹木や大量の枯れ葉により埋没した石積みが城内の各所で次々と現れ、やがてこの城最大の特徴である大規模かつ高さのある石積み遺構が姿を現し始めたことである。教育委員会でも、中世城郭におけるこの遺構の重要性を鑑み下草刈りと併行して現況立面図の作成を平成 11 年度より順次実施し、出来る限りでの現状記録に努めてきた。また平成 13 年度にはその構造を把握するため、トレンチを設定し発掘調査を実施、カワラケの一括出土をみた。

こうした状況のなかで平成 14 年 9 月 5 日、比企地域に所在する中世遺跡の学術的な評価を行なうとともに、将来的な保存・活用策を調査、検討することを目的に文化庁記念物課を指導機関として、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課及び埼玉県立歴史資料館が事務局となり、比企地域の各教育委員会が協力機関として「発掘調査等評価指導委員会 比企地域中世遺跡検討委員会」が設置された。

この委員会において、「小倉城跡に関しては中世山城として大規模な石積み遺構と技巧に富んだ繩張りをもち、かつ城下集落を伴う可能性もあり、周辺の風致を含めた遺構の遺存度の高さから高い評価を得てきた城跡ではあるが文献資料がないため歴史が明確ではなく、繩張り研究と歴史的背景から後北条氏による築城とされてきたものの、これらを考古学的に裏付ける学術調査の必要性」が求められた。村教育委員会では委員会の指導・助言を受け、城跡に関して、①年代を明らかにする、②構造・性格・特徴を位置付ける、③保存状態を確認する、この 3 点を主たる目的として発掘調査を実施することとなった。調査箇所・調査方法に関しては上記の目的から委員会の指導を受け本郭中央部に幅 3 m で十字のトレンチを設定し調査を実施することとなった。委員会は年 3 回開催され、その都度指導・助言を受けながら調査を実施した。調査において現地表下 5 ~ 15 cm に結晶片岩系の岩盤がかなりの部分発達し、遺構は岩盤を掘削、穿って構築されており基本的に良好な保存状態であることがわかった。また、調査はトレンチによる遺構確認を主としたため、遺構の掘り下げを行っていないが、年代の判明する遺物も出土し、現状での年代観もえられた。

発掘調査は、15 年度に実施され、整理作業は平成 16 年度に行なわれた。総調査面積は、180 m<sup>2</sup> である。発掘調査の実施に際し、村教育委員会から文化財保護法第 58 条の 2 の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、平成 15 年 5 月 26 日から 12 月 26 日まで調査を実施した。

なお、発掘調査にあたり平成 15 年 5 月 26 日付け玉教発第 155 号をもって埼玉県教育委員会教育長宛、埋蔵文化財発掘調査の通知をおこなった。

## 2 発掘調査と報告書刊行事業の組織

### 事務局

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 教育長     | 野口昌夫                |
| 事務局長    | 長壁 宏（平成 15 年度）      |
| 事務局長    | 大澤幸正（平成 16 年度）      |
| 事務局長補佐  | 内室睦夫（平成 16 年度）      |
| 教育総務係長  | 石川安司                |
| 社会教育係主任 | 田中和浩                |
| 社会教育係主事 | 押田貴久                |
| 社会教育係主事 | 矢部亮司（平成 16 年 9 月退職） |

発掘調査・整理報告書刊行担当 矢部亮司 石川安司

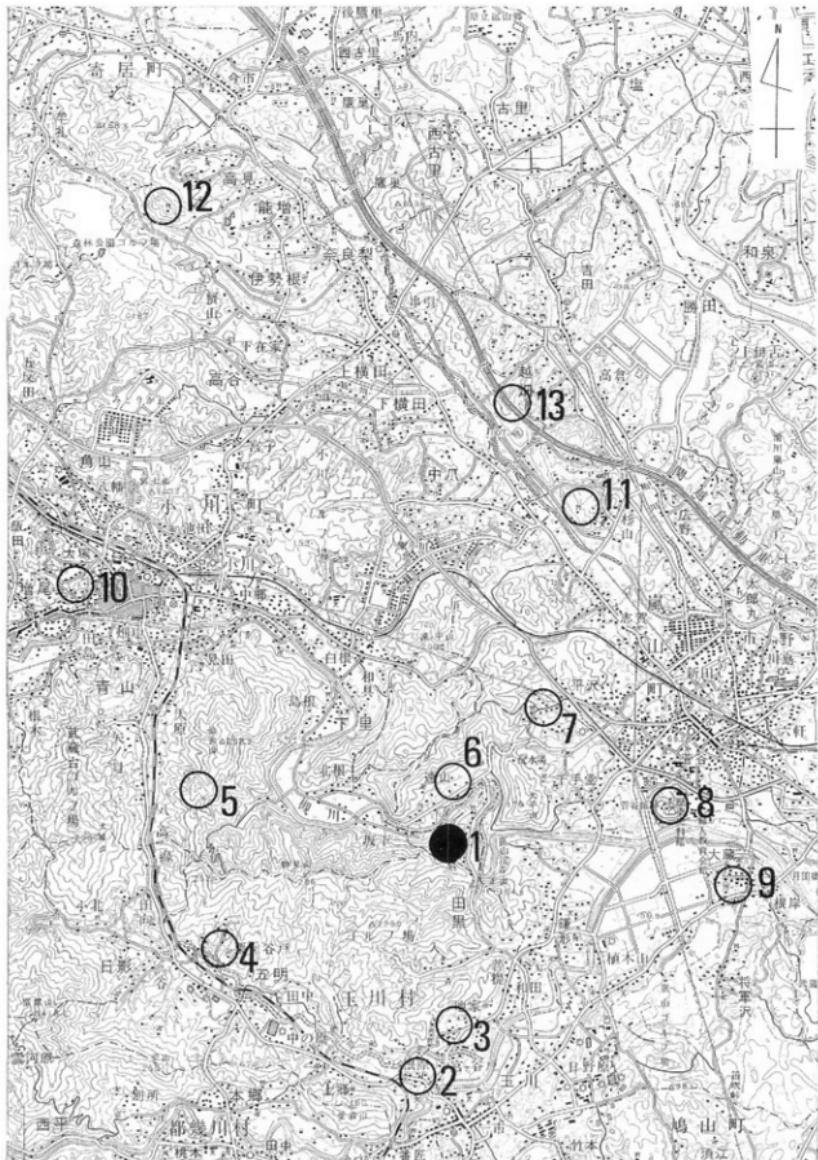
## II 地理的・歴史的環境

### 1 地理的環境

小倉城は比企郡玉川村大字田黒字城山に所在し嵐山町遠山、小川町下里の境界付近に位置する。外秋父の山地帯と関東平野の境界にあり、大きく蛇行を繰り返す櫛川と大平山（嵐山町）や正山（玉川村、嵐山町）の山地に囲まれる。その構造は、城山と山麓の大福寺の平場を中心とする根小屋を持つ可能性が高い梯郭式の山城で、大福寺前面の構堀、城山の南北より流れ出る自然の谷、小倉集落を截せる段丘と櫛川、更にその外側に広がる山稜など自然の地形を巧みに取り込むことにより幾重にも重なる同心円的に画された空間の中に入り、自然地形を利用した総構え的な景観を有する（注1）。城からは、櫛川の上流下里方面と下流（都幾川）の菅谷、鎌形、大蔵、唐子、松山方面の視界が良好に確保されておりこの城にとって繋ぎの位置にある青山城をはじめ菅谷城や遙かに松山城（昭和 11 年頃）が目視出来たとされ（注2）山上からの視界は充分に確保されていた点は確認しておきたい。従来、周りを高山に囲まれ陰の城または築城の定石（尾根続きに小倉城より高い峰が連なる）に反する立地などと称されたが（注3）、この城にとっては青山城と菅谷、大蔵、唐子を含めた都幾川（櫛川）流域への視界の確保がまず欠かすことのできない絶対条件であり、その為にこの地がわざわざ占地されていると解せよう。都幾川（櫛川）の重要性は鎌倉時代以来、武藏型板碑の石材搬出における大動脈として機能してきた経緯があり、戦国期に至っても比企地方と南関東の物流を語る上で重要であった点に代わりはないと考えられる。従来小倉城は鎌倉街道など陸路上からはやや奥まった地点にあり同街道上の菅谷城－杉山城－高見（四津山）城に対し、設置理由がいまひとつ不鮮明であったが、鎌倉街道上道と山の根筋（現在の県道飯能－寄居線または J R 八高線沿線ルート）の中間地域にあり双方にアクセス出来る点は戦国期の中武藏地域主要道の変移を想定する見解もあり（齋藤 2005）重要である。この城は、櫛川、都幾川ルートによる河川交通の掌握と合わせて鎌倉街道と山の根筋による陸路の監視（封鎖）を担っていた点を指摘しておきたい。

### 2 歴史的環境

同時代の文献資料は現在確認されていない。ただし、発掘調査により 15 世紀末～16 世紀前半



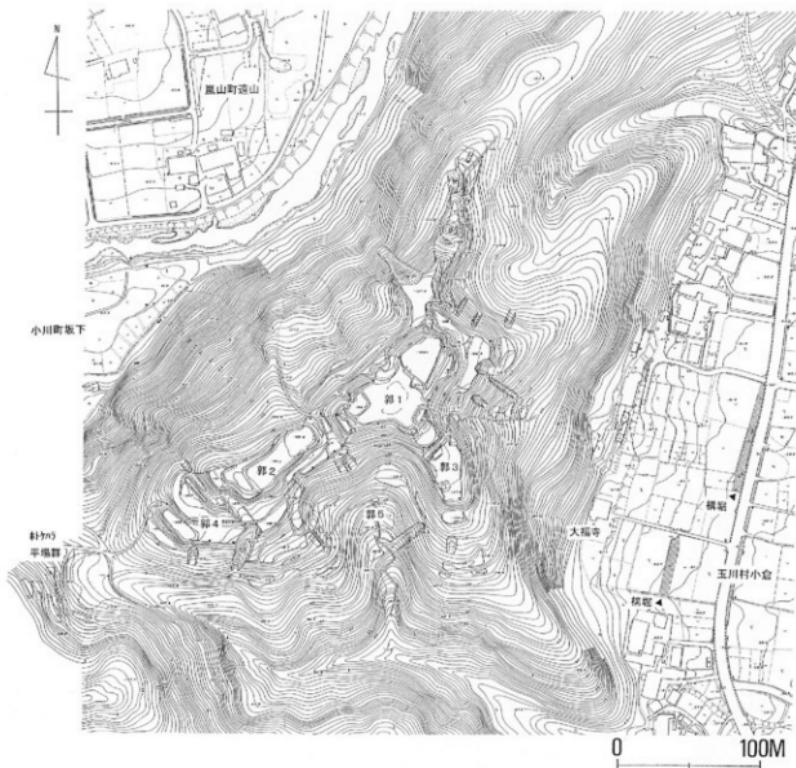
第1図 周辺の遺跡



第2図 小倉城跡地形測量図

の遺物が確認されたため、長享4年（1488）小倉城から一山隔てた平沢寺に山内上杉方の陣所がおかれた須賀谷原の合戦に関する記録には注意する必要がある（注4）。記録的には江戸時代の地誌類に登場し城主は新編武藏風土記稿で遠山氏、武藏誌で上田氏とする。

城主とされる遠山氏を開基とする遠山寺の記録では、開山歎詠全芳が深谷上杉氏と関わりをもち永正

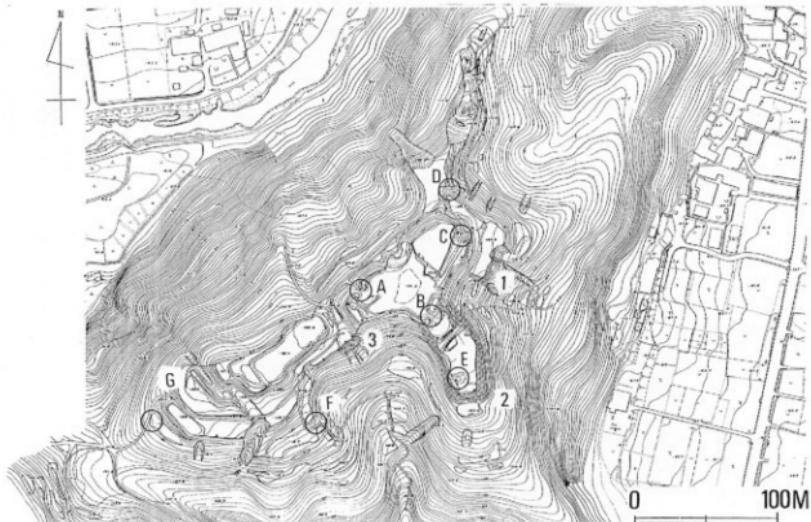


第3図 小倉城跡概要図

十五年（1518）示寂していることから山内上杉氏や深谷上杉氏からのアプローチにより 15 世紀後半以降の地城史を再検討する必要もある。

周辺の遺跡（1図）には、櫛川を隔てて西 500m にある No.6 山根遺跡（13～16 世紀）、櫛川下流 2.3 km に No.8 菅谷城跡、上流 2.5 km に No.5 青山城跡、都幾川流域で南へ 2.5 km ほどに No.2 玉川陣屋・根際遺跡（12 世紀末～17 世紀前半）があり、北東へ 1.5 km に須賀谷原の合戦のおり陣所のおかれた No.7 平沢寺（12 世紀中頃～16 世紀）が所在する。その他、村内には山の根筋に属する中世円通寺にかかる No.4 栗ヶ谷戸遺跡群で 14～15 世紀の大量の在地土器が出土し、玉川陣屋の対岸にあたる No.3 玉川堀ノ内遺跡群でも 15 世紀代の遺物が出土している。

紀年名の判明する周辺の板碑では小川町坂下所在のものが 1299～1570（永禄十□…67～70）年、嵐山町遠山では 1389～1568 年、玉川村小倉では 1280～1414 年でそれぞれ城に接する中世村落消長の参考となる。



第4図 石積み配置図

### 3 遺跡の概観

#### a 繩張り

標高 137m 地点に本郭を配し、梯郭式に東南、南西、北東の三方向に郭を配する。山麓との比高差は約 70m で大福寺は前面に構堀があり根小屋、居館となる可能性がある。基本的な構造は概略南北方向に走る主尾根に沿って郭 1 と郭 2 を並列して配置し郭 1 南東と郭 2 南西を堀切り郭 3、郭 4 を設ける。更にそれぞれ南面、北面方向と東面方向に階段状に郭や平場を連ねる。(2、3図)。郭 1 は現状で土壘の規模、虎口の造り、全ての導線が郭 1 に収斂する点から、郭 2 はもちろんのこと全ての郭との序列で明らかに優先し主郭と解せよう。拱形虎口や郭 2 南の横堀とセットになったクランク状の星線の折れ、それに組み合わされた橹台風の土壘による横矢がかり(松岡 2002)、郭 1 南・郭 3・郭 4 の虎口に見られる比企型虎口(西股 1999)など、それらはいずれも後北条系の技術として認識又は発展したものとされている場合が殆どである。各郭の平面形としては上述したとおり郭 2 南西に堀とセットになった比較的大きな折れがあるが、それ以外は虎口や星線に小さな折れを持つのみで、星線の折れは顕著ではない。それは、青山城や腰越城にも共通する要素と言える。これらの 3 城はむしろルートの折れにこそ主眼が置かれており、その点に腐心しているように思われる。

#### b 石積み遺構

##### (1) 概要

現在確認されている石積みは、図に示したとおりで本郭東側外面を中心に総延長 100m 以上に達しており、特に本郭東虎口前面の平場から三郭にかけての東西南の三面(4図)は、すべてが石積みでありこの部分の最大高が 5m に及ぶ。また虎口については本郭に開口する 3 つの虎口(4図 A、B、C)をはじめ三郭西面の虎口(4図 E)、本郭北腰郭の橋形状虎口(4図 D)、二郭南面の腰郭から谷へ降りる虎口(4図 F)と虎口 G の下段平場の計 7 カ所に確認され、主要な虎口にはすべて見られ、視覚効



郭3 西外面石積み立面図



郭3 南外面石積み立面図

0 10M

第5図 郭3西外面、南外面石積み立面図

果も加味された登城ルートとの絡みで理解されよう。また、本郭内については 16 年度にかけて一部土塁の内側据部分などに石積みを確認しており、郭内部空間にも積まれていることが判明したが部分的な精査に止まり未だ状況は判然としていない。城全体の埋没状況からすれば今後も新たな石積み箇所が発見される可能性は高く、小倉城石積み遺構については今後の調査により訂正追加される部分も予想される。

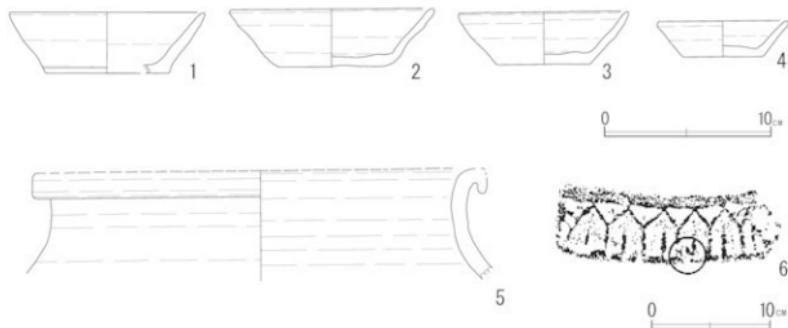
## (2) 石材と積み方

城の所在地が緑泥片岩の産地小川町下里に連なるため結晶片岩系の石材が使用されている。いずれも基本的に切り出された加工石である。ただし板碑などに見られる明瞭な鑿痕などは現在までに確認できない。積み方は厚さ 10 cm 前後の板状の石材を柱目状（石材の長辺面を揃えて）に積んだもので結晶片岩の特性を活かした積み方である。小さな片岩片が間詰めされる箇所もある。八王子城や太田金山城のような礎壇上にセットバックした積み方は基本的に現在確認されていない。しかし三郭東面のトレンチでは通路状の平面を一ヵ所確認しており、その解釈には課題を残す。また小さな折りを設けて角を作り出す部分が虎口周りに見られる。ただし高さを保ち大きく出升状に角を作り出すことは石材の限界からか難しいようで三郭南端のふたつのコーナーは隅丸状に造り出している。裏込めは倒木で崩落した部分の断面観察では存在しない。ただし石材裏の土層には片岩片が含まれており自然に混入したものか人為的に破碎したものを混ぜ込んでいるのかは現状で判断できない。人為的なものならば排水のための工夫と考えることもできる。積まれる石材が元来均一にした板状のものであることを考えると積み上げる技術としてその簡便性から裏込め技法の発達を促さなかった可能性もあり、この場合裏込めの有無により石積み遺構の年代を推定することは現段階では難しい。

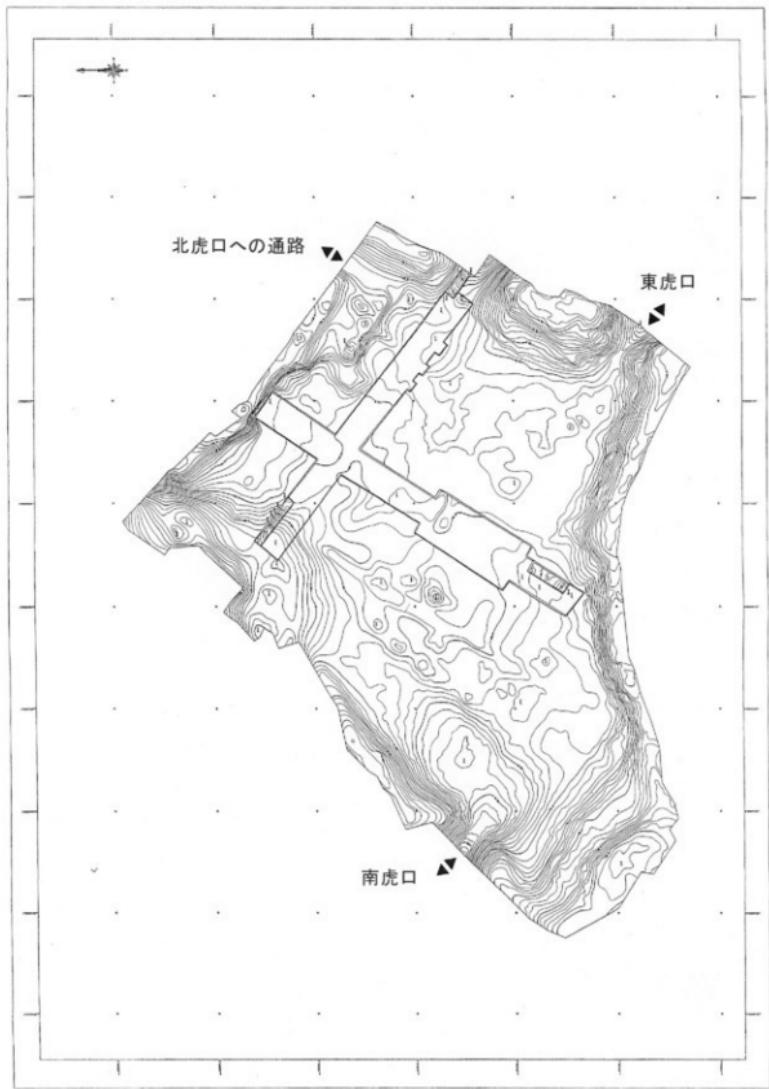
比企地方でも、小倉の他に青山城、腰越城、杉山城、菅谷城（橋脚部分）で石積みが確認され秋父地方でも散見されている。まずは、比企、秋父の類例を整理する中で、この地域固有の技術的系譜を明らかにする必要がある。

### c 平成 15 年度以前の採集・出土遺物

6 図 1 ~ 4 は平成 13 年度に村単独事業の発掘調査で出土したカワラケで出土地点は郭 3 の東外面より出土した。すべて、同一の埴土で一括りの強い資料であり比較的大きな破片が多く破面も殆ど摩滅していない点から郭 3 又はその下の通路より儀礼に伴って投棄された可能性が高い。大、中、小の法量からなる。5 は県の実施した中世城館跡調査に伴い、昭和 58 年度に採集したもので常滑

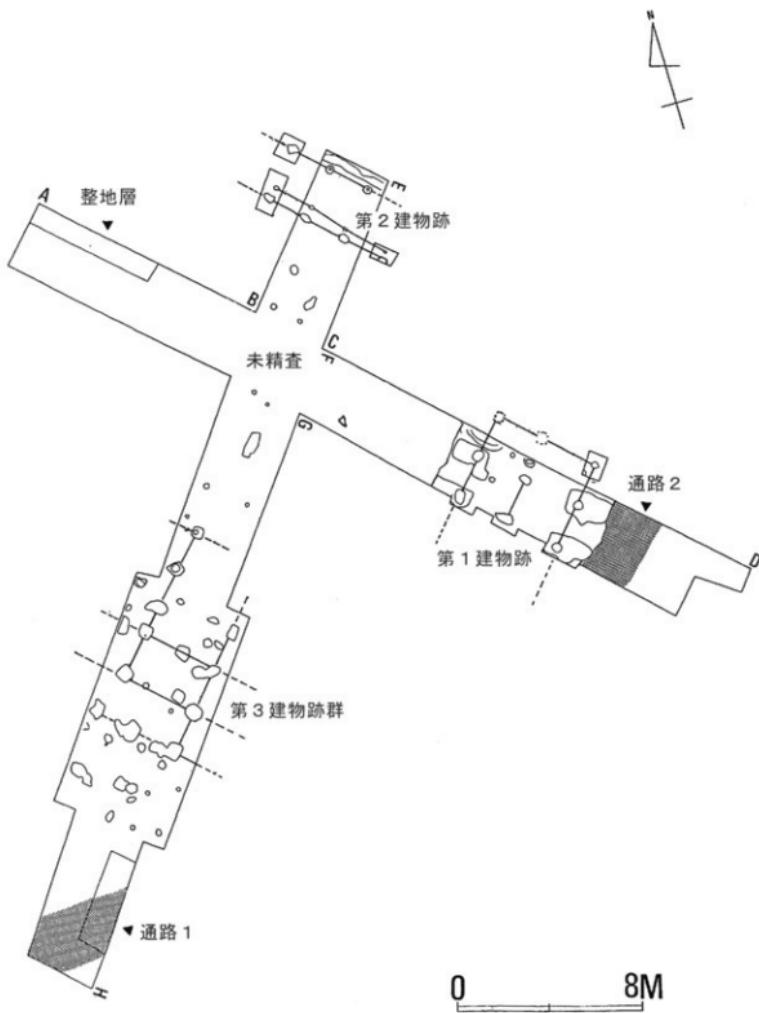


第 6 図 平成 15 年度以前の採集・出土遺物

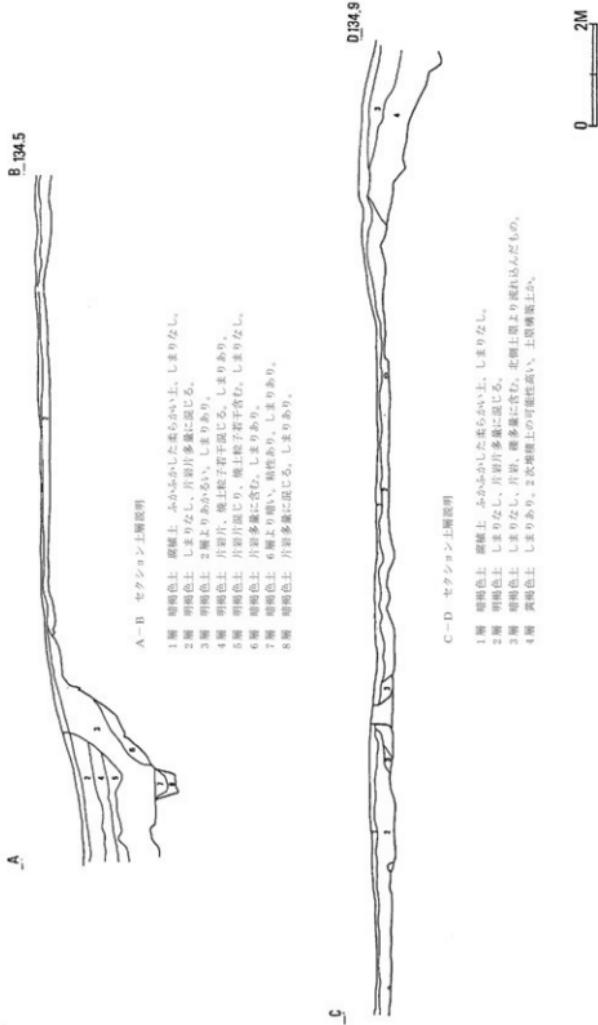


S = 1 / 500

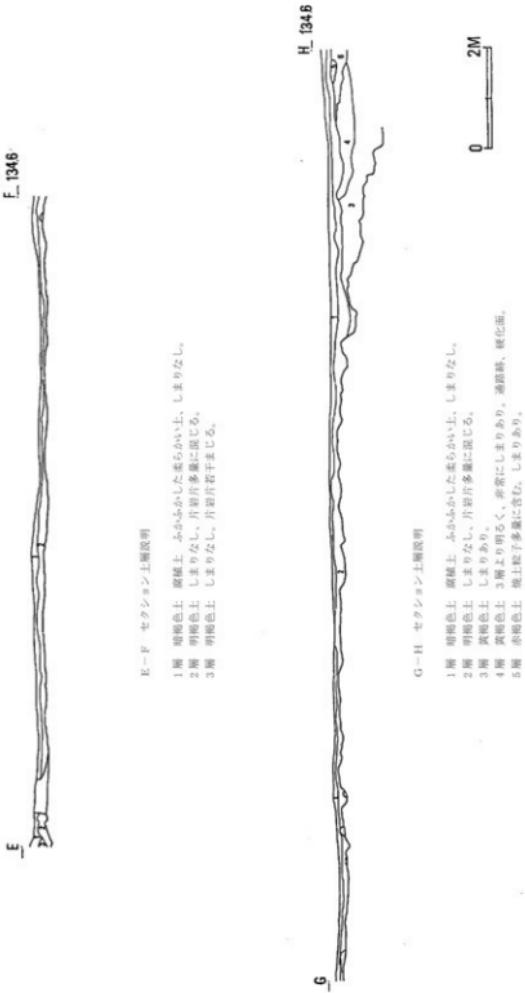
第7図 郭1測量図



第8図 遺構配置図



第9図 東西トレンチ セクション図



第10図 南北トレーナー セクション図

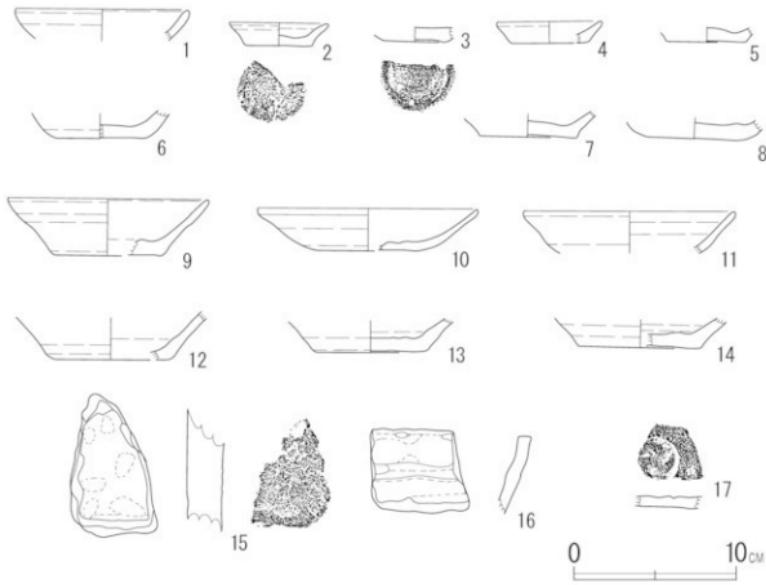


第11図 遺物分布図

甕の口縁部の破片である。5～6a期のもので本来N字状を呈する部分を欠失する。6は昭和初期に採集されたもので玉川小学校に保管されていた。所謂、比企型上向き剣頭文軒平瓦で東京都府中市の大國魂神社（六所宮）より同范資料が出土している（石川1996）。

#### 注

(注1)郷土史研究の大先達であり県指定当時(昭和11年)地元玉川尋常小学校へ教頭として赴任しておられた小鷹健吾氏は『郷土玉川村史』の中で下里から嵐山渓谷までの櫻川の蛇行により形成された小倉(玉川村)、遠山(嵐山町)、坂下(小川町)の閉ざされた集落とそこを縫う隘路について、小倉城に関わる集落として位置付け「天然の内曲輪」と解している。極めて先駆的な卓見であろう。その検証は今後の地域研究の中で明らかにしてゆかなければならぬ。



第12図 トレンチ出土遺物 1

(注2)『郷土玉川村史』

(注3)『日本城郭体系』第5巻 埼玉・東京

(注4)『梅花無尽藏』

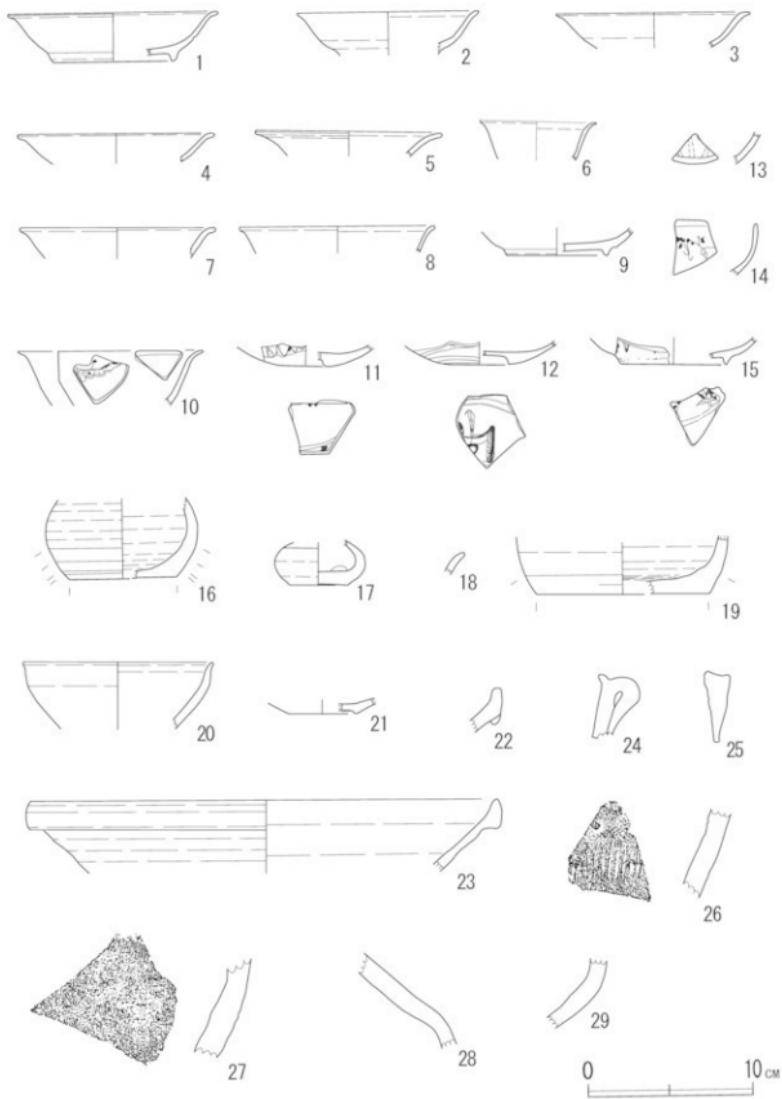
### III 遺構と遺物

#### 1 遺構

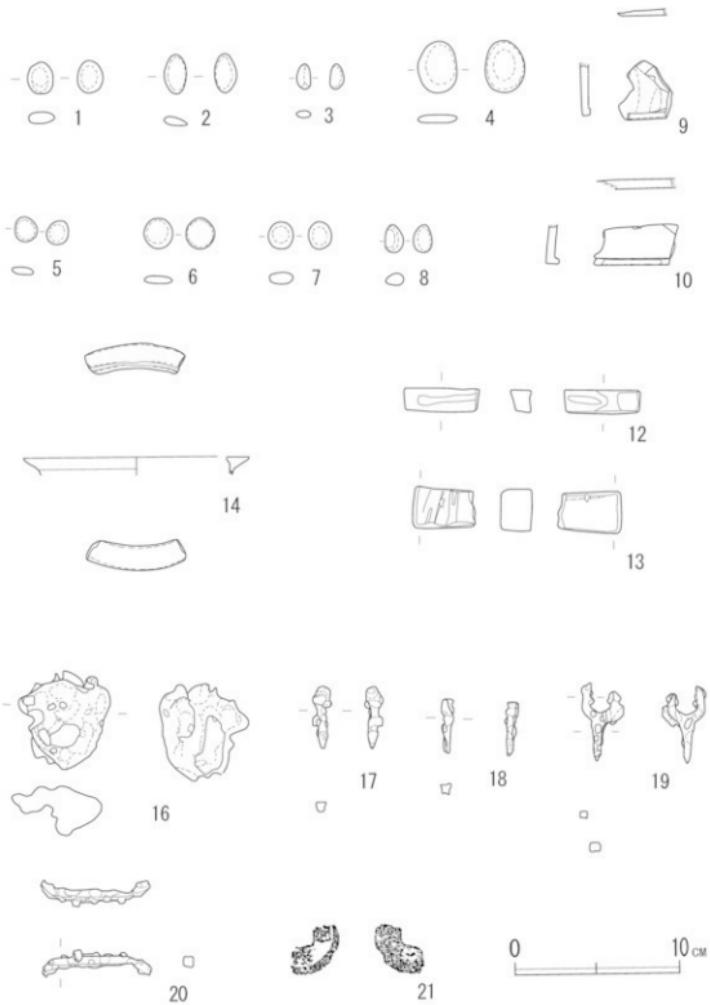
調査区は幅3mを基本に十字のトレンチを設定し必要に応じて拡幅している。(7図)。ほぼ全域に渡り現地表5~10cm下に結晶片岩系の岩盤が存在し、その部分では遺構確認は比較的容易であった。ただしトレンチの中央の交差部分と南端、西端では岩盤が潜り込み黄褐色系の土層の堆積が見られた。南端と西端部分はサブトレンチをもって深掘し中央の交差部分は15年度未精查となった。

##### (1) 建物跡

トレンチ調査により多くの柱穴が確認されており、15年度現在大きく3グループに分けられる(8図)。柱穴は、1m前後の大型のもの、50cm前後の中型のもの、10~20cmの小型のものがあり、概して大振りのものが多い。トレンチ幅のため、各柱穴の組み合わせは判然としないが、第1建物跡と第2建物跡はほぼ確実で建物の軸は郭1内郭の土塁裾と同一軸で内郭部分の企画性の高さを伺わせる。柱間は220cm(7尺前後)前後のものと200~190cm(6尺5寸前後)程度のものがある。また1号建物跡は焼土ブロックや焼けた壁土が確認面で大量に出土し焼失又は片づけによる痕跡を残す。第3建物群では、切り合いが見られ、柱穴の時期や新旧を想定できる可能性がある。



第13図 トレンチ出土遺物 2



第14図 トレンチ出土遺物 3

## (2) 整地層

郭1トレンチ西隅で2期以上の造成痕がセクションより確認された。最下層からC群の白磁が出土しており、造成開始時期の一端を示している。

## (3) 通路跡

トレンチ南西端と南東端に通路跡と思われるものが確認されている。いづれも郭1の造成軸と一致し建物同様、企画性を伺わせる。通路1は南虎口から東虎口にかけての土壙堀（7図）に沿って走行すると考えられる。路面はロームを突き固めた硬化面で幅は約220～230cm程である。通路2は北虎口へ向かう現状通路部の南側延長線上に当たり第1建物に接する。第1建物からは約5cm程の段差をもって上位に岩盤が堀削され僅かな差であるが立地面を異にする。幅は岩盤掘削がさらに東南の土壙下へ続くため不明である。

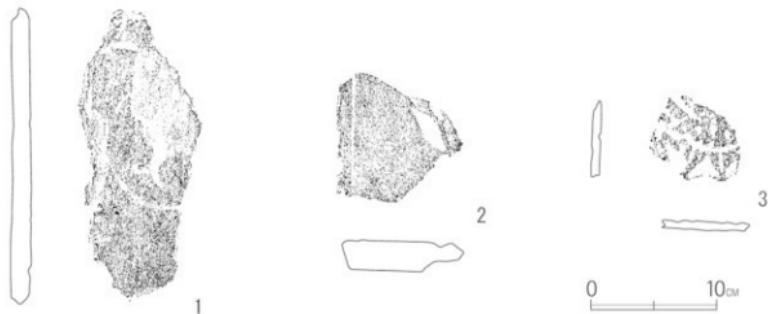
## 2 遺物

出土遺物には、カワラケ、在地土器、搬入陶磁器、基石、硯、板碑片、釘などの鉄製品、銭、碗型滓、壁土、加工石材などがある。總体としてまず<sup>13</sup>、<sup>14</sup>世紀段階があり、次に<sup>15</sup>世紀末～<sup>16</sup>世紀後半の遺物群がある。また染め付け碗B群とE群に火災による被熱痕が見られ、常滑の大甕には破面に漆つぎのある資料が複数ある。

搬入陶磁器の内、瀬戸美濃製品では、中期IかIIの合子、大窯I～III期の天目茶碗、稜皿、描鉢、徳利、小瓶があり、輸入磁器には白磁C群皿・碗・菊皿、染め付けB群碗、C群皿、E群碗がある。本郭出土のカワラケは<sup>13</sup>世紀の手づくねから存在し器形にもまとまりがない。器形的には本庄市東本庄遺跡（注1）や嵐山町菅谷館跡（水口・栗岡2003）に類似するものもある。

第12図1～14、17はカワラケで、1は手づくね2～14はロクロによる。10は内底面に円状の沈線が見られ川越城跡など県内各所で出土する「の」の字状タイプ（注2）の系譜を引くものと考えられるが川越城のものはやや深めで器形を異にする。より近いものは小川町中城跡（吉田2001）で出土している。

17は内底面に三巴文が押印されている。この資料のみ砂粒を多く含み特殊な胎土をもつ。15は火鉢、16は熔培型の内耳土器である。第13図1～9、13は白磁で1～5、7～9はC群の碗皿類である。6は小杯13はD群の菊皿の破片である。10～12、14、15は染め付けで10はB群の碗、11、12はC群皿、14、15は同一個体でE群の碗である。16～23は瀬戸・美濃製品で17が中期I～IIの合子



第15図 トレンチ出土遺物 4

| 用 途   | 産 地  | 種 類   | 破 片 数 (%)     |
|-------|------|-------|---------------|
| 食 器 具 | 在地製品 | 土 器   | 266 ( 89. 5)  |
|       | 国産陶器 | 瀬戸・美濃 | 10 ( 3. 4)    |
|       | 中国製品 | 白 磁   | 14 ( 4. 7)    |
|       |      | 染 付   | 7 ( 2. 4)     |
|       |      | 小 計   | 21 ( 7. 1)    |
|       |      | 計     | 297 ( 82. 7)  |
| 調 理 具 | 国産陶器 | 瀬戸・美濃 | 5 ( 100. 0)   |
|       |      | 計     | 5 ( 1. 4)     |
| 貯 藏 具 | 国産陶器 | 瀬戸・美濃 | 6 ( 11. 8)    |
|       |      | 常 滑   | 45 ( 88. 2)   |
|       |      | 計     | 51 ( 14. 2)   |
| 煮 炊 具 | 在地製品 | 瓦 質   | 1 ( 0. 3)     |
| そ の 他 | 在地製品 | 瓦 質   | 4 ( 80. 0)    |
|       | 国産陶器 | 瀬戸・美濃 | 1 ( 1. 4)     |
|       |      | 計     | 5 ( 1. 4)     |
| 総     | 計    |       | 359 ( 100. 0) |

(シンボジウム埼玉の戦国時代 検証 比企の城 掲載の小倉城跡に関する遺物組成表に誤りがあった。上記のとおり訂正する。)

第1表 平成15年度出土遺物組成表

でそれ以外は大窯期の資料となる。16は大窯I～IIの小瓶、18、19は大窯IIIの徳利、20は同IIIの天目茶碗である。21は鉄軸の稜皿、22、23は大窯III前半の掘鉢の口縁部の破片である。26、27は中世前半期の渥美か常滑産の大甕胴部破片で13世紀代の資料と思われる。24、25、28、29は中世後半期の常滑大甕の資料で24は9～10期の口縁部、25は10～11期の口縁部である。第14図1～8は墓石、9、10は同一個体の石製硯、12、13は砥石で12は刃先の細いものを研ぐものか。16は碗型滓、17、18は鉄釘である。14は銅鉢で火中したものか歪みがみられる。21は銅錢で僅かに□宋通□と読める。第15図は板碑で1は最上端に連座の一部が見えその右下方に月輪と梵字の一部(サ 親音か)が確認できる。2は連座の一部と棒線がみえ、側面の調整が未だ丁寧に行なわれており14世紀代の資料の可能性が高い。3は蜂巣と連座が確認できる。

#### IV 小結

現在までの調査は、遺構確認を中心に行っており、確認されている建物群など遺構の変遷については不明である。今後、代表的な幾つかの柱穴を発掘する中で検討していきたいが、郭1の造成軸と一致する建物跡や通路跡が確認でき郭1内郭部分の企画性の高さが伺われた。現状の遺物からは以下のとおり3段階の年代設定が可能である。

第1段階 13～14世紀 大福寺との関わり

手づくねカワラケ（12図1）、常滑（渥美）の大甕（13図26、27）、瀬戸合子（13図17）、板碑片（15図2）比企型検頭文軒平瓦（6図6）

第2段階 15末～16世紀前半 城の時代 1

染め付け碗B群（13図10）白磁碗皿C群（13図1～9）、染め付け皿C群（13図11、12）、常滑9～10期大甕（13図24）

第3段階 16世紀後半～後半 城の時代 2

染め付け碗E群（13図14、15）、白磁D群菊皿（13図13）、在地内耳土器（12図16）、常滑11～12期大甕（13図25）、大窯III期擂鉢（13図22、23）、天目茶碗（13図20）、徳利（13図18、19）

この3段階の解釈として、まず第1段階は山麓に所在する大福寺と関わる場としての利用が考えられる。板碑の存在から供養の場などとして使用された可能性が高い。

続く第2段階は一定の空白の後 15世紀末から設定される。この現象については、現在以下のように考えている。それは、小倉地内で確認されている板碑の造立が今のところ 15世紀前半までであり同中葉以降確認できない点にある。板碑資料の取り扱いについては慎重を期す必要があるが板碑石材の産出地を間近に控える櫛川・都幾川流域の比企西部地区では、通常旧村単位で 16世紀代の板碑が所在するところであり 15世紀末以降の板碑が確認できない点は大福寺または小倉集落にこの時期なんらかの変革があり遺物の空白が生まれたと考えている。ちなみに櫛川の蛇行と山地により小倉、遠山、坂下の集落は流域に連なりながらも閉じた空間として存在し坂下、遠山とも 16世紀半ばまで板碑の造立が確認されている。さらに補足として、トレンチ西北端で確認された整地層の最下層より白磁C群碗が出土しており、郭1の造成開始時期が 15世紀末以降となる可能性も指摘できる。ただし白磁C群は年代幅の広い遺物であり、やはり慎重に扱う必要がある。いずれにしても、遺物の空白は場の利用の変化を示していると解せよう。よって第2段階は場の利用が変わり広義の寺院から城郭として改変取り立てられた段階と考えたい。今回の調査では、出土遺物から明らかにこの地方で後北条勢力が安定してくる永祿段階より以前の資料が出土している。從来縄張り研究から後北条段階の城として認識してきたこの城にとっては思いもよらない成果であった。この地域では第2段階頃より両上杉氏の抗争から緊張関係が高まり山内上杉氏による平沢寺や菅谷に関する記事が複数確認できる。したがって小倉城がこの時期取り立てられる要素は充分ある（注3）。その場合、未だこの地域に後北条氏が進出しておらず、両上杉勢力による築城を視野に入れる必要があろう。山内上杉氏はどうか。嵐山町遠山の遠山寺は小倉城主ゆかりの寺とされ同寺に所在する位牌や過去帳は小倉城に遠山氏が在城した根拠とされるが、その開山漱恩全芳は山内上杉氏に連なる深谷上杉氏と関わり永正 15年（1518）示寂している点注意が必要である。扇谷上杉氏はどうか。その場合は上田氏による取り立ても考慮する必要があろう。それは、この城が上田氏の根拠地の一つである小川盆地の最東端にあり閉ざされた小川盆地より東へ押し出し松山城への連絡をとるには、まさに欠かすことのできない地点であるからに他ならない。小倉城から見て菅谷、平沢寺、遠山寺はいずれも櫛川の対岸にあり上田氏の対山内上杉氏最前線に位置すると考えることもできる。またこの城からは南北方向の視界は悪いが東西方向へは十分な視界が確保されている。特に東方はきわめて良好に視界が広がり菅谷、大藏、唐子、松山の町が見渡せその先には松山城が所在する。

第3段階は、まさに從来の後北条段階の城とする位置づけを追認する形となるが大窯編年の大窯III期の遺物が定量出土しているなか、確実にIII期後半とされるものが現在確認されておらず今のところ天正末年までの使用は考えづらい。しかし、注目されるのは大窯II期で廃絶し戦国最末期に向

かつて淘汰され拠点城郭へ収斂して行く城郭群の中でこの城が 16 世紀半ばから後半期まで使用された点である。そこに中規模でありながらもこの城の特徴を見いだすことができるのかもしれない。この問題は、大規模な石積みの使用や郭 1（主郭）内の企画性の高い造成と建物配置、城下集落の問題などと関わり重要な問題を孕んでいるが今回の報告からのみでは詳述することは出来ない。今後の課題としたい。

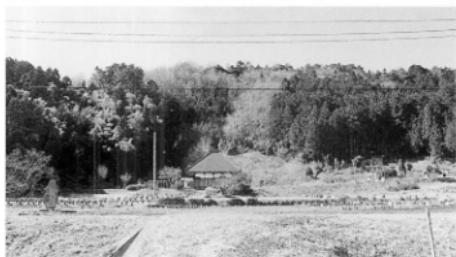
さて今回の調査で提示した第 3 段階の 16 世紀半ばから後半という年代観は、伝承どおり後北条氏の重臣達山氏の利用が確認されたとするのも一つの解釈として成立する結果である。ただし後北条段階と言ってもそのまま達山氏の利用が確認されたわけではあるまい。もちろん、それを否定するものでもないが今後文献資料の再精查や聞き取り調査、考古学調査など総合的に検討してゆく必要を感じる。いずれにしても小倉城に関する調査は始まったばかりである。

#### 注

- (注 1)『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証 比企の城』資料編参照  
(注 2)埼玉県・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『川越城／古在家 II』  
(注 3)利根川宇平 1991「中世の玉川村」『玉川村史』通史編

#### 参考文献

- 小鷹健吾『郷土玉川村史』  
柳田敏司・段木一行 1979『日本城郭体系 5』埼玉・東京  
玉川村 1991『玉川村史』通史編  
松岡 進 2002『戦国期城館群の景観』校倉書房  
西股純生 1999「後北条氏の築城技術における虎口形質の獲得過程」『織豊城郭』6 号  
史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会 2005『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証 比企の城』  
斎藤慎一 2005「比企地域をめぐる街道の変遷」『シンポジウム 埼玉の戦国時代 検証 比企の城』  
吉田義和 2001『町内遺跡発掘調査報告書 VII』小川町教育委員会  
水口由紀子・栗岡眞理子 2003「菅谷館跡出土遺物の再検討」『研究紀要』第 25 号埼玉県立歴史資料館  
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視点から－ 資料集』  
日本福祉大学知多半島総合研究所 1994『中世常滑焼をおって』資料集  
梅沢太久夫 2003『城郭資料集成 中世北武藏の城』  
中世を歩く会 2002『在地土器検討会資料集－北武藏のカワラケ－』



大福寺と小倉城跡



小倉城跡（中央低山）と桙川（小川町下里より）



小倉城跡と城から伸びる  
直線道（小川町下里より）

図版 2



郭1 東下腰郭 石積み



郭3 東面 石積み



郭1 東下腰郭 石積み



郭3 東面 石積み



郭1 東下腰郭 石積み



郭3 西面 石積み



郭3 虎口 石積み



郭3 西面 石積み



郭3 東面 石積み



郭3 東面 石積み



郭3 東面 石積み



郭3 東面 石積み折れ部



郭3 東面 石積み



郭3 東面 石積み折れ部



郭3 東面 石積み折れ部



郭3 南東コーナー 石積み

図版 4



郭1 東西トレンチ（西から）



郭1 東西トレンチ（東から）



郭1 南北トレンチ（南から）



郭1 南北トレンチ（北から）



第3建物群



第3建物群



第1建物跡



第2建物跡



通路2



通路2 段状掘削

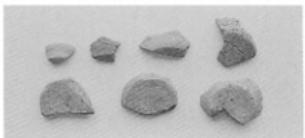
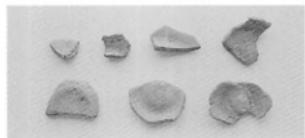
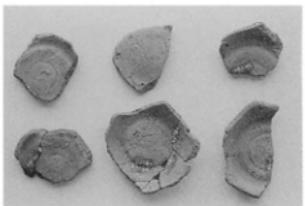
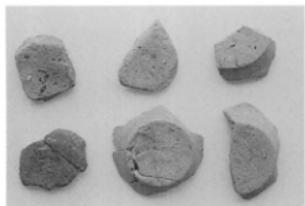
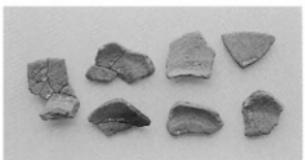


通路1



通路1と土層

図版 6



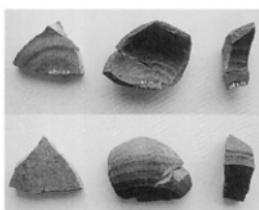
郭1 トレンチ出土カワラケ



在地土器（表）



在地土器（裏）



大窯期德利、小瓶



古瀬戸合子



常滑大甕（表）



常滑大甕（裏）



渥美及び常滑大甕



常滑大甕

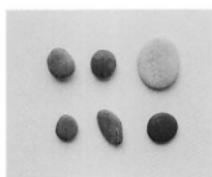
図版 8



板碑



硯・砥石



基石



金属製品



楕形滓



壁土

## 報告書抄録

|                  |  |           |                  |                                 |  |                   |      |
|------------------|--|-----------|------------------|---------------------------------|--|-------------------|------|
| フリガナ             | ソンナイイセキ  |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 書名               | 村内遺跡   |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 調査名              | 埼玉県指定史跡小倉城跡第1次発掘調査報告書  |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 巻次               | I  |           |                  |                                 |  |                   |      |
| シリーズ             | 玉川村埋蔵文化財調査報告書  |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 巻次               | 第12集   |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 著者               | 石川安司   |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 編集機関             | 玉川村教育委員会   |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 所在地              | 〒355-0305 埼玉県比企郡玉川村大字玉川2490  |           |                  |                                 |  |                   |      |
| 発行日              | 2005年3月31日   |           |                  |                                 |  |                   |      |
| ふりがな<br>所収道跡     | ふりがな<br>所在地  | コード       | 北緯               | 東経                              | 調査期間                                     | 調査面積              | 調査原因 |
|                  |  | 市町村 道跡    |                  |                                 |  |                   |      |
| おぐらじょうあと<br>小倉城跡 | さいたまけんひきぐん<br>埼玉県比企郡<br>たまがわむらおおあざたぐろ<br>玉川村大字田畠<br>あさし山やまと<br>字城山1184 | 11345 022 | 36度<br>1分<br>43秒 | 139度<br>17分<br>55秒              | 20030526<br>~<br>20031226                | 180m <sup>2</sup> | 道路整備 |
| 所収道跡             | 種別   | 主な時代      | 主な遺構             | 主な遺物                            | 特記事項                                     |                   |      |
| 小倉城跡             | 城跡   | 戰国        | 建物跡・道路跡・整地層      | 陶器器（染付、白磁、瀬戸美濃）、かわらけ、鉄釘、碁石、板碑ほか | 本郭の造成主軸と同一軸の建物跡と道路跡を検出。城中心部の企画性の高さが判明した。 |                   |      |

玉川村埋蔵文化財調査報告第12集

## 村内遺跡 I

—埼玉県指定史跡 小倉城跡 第1次発掘調査報告書—

2005年3月31日

編集・発行 玉川村教育委員会  
印 刷 朝日印刷工業（株）